

年会費制導入のいきさつ

さて、本年1月18日、山桜会新年会に先だって、臨時総会が開催されました。これは、いまでもなく、年会費制導入決議を行うためでした。すでに茨木中highで開催された山桜会理事会において、それまでの度重なる導入論議の延長線上として、理事会出席者全員一致の承認のもとに、導入決議が行われました。臨時総会は、この結果を踏まえてのものです。

しかしながら、そもそも年会費制導入なものは、山桜会史上、劇的なことです。これは、創設以来一貫して終身会費制をとってきた山桜会の財政基盤である終身会費を入会費制に改め、毎年、年会費徴収のご協力をお願いするものだからです。

年会費制導入のねらいは何か

1つには、日本の社会制度にかかわる根本的なことです。日本の少子化現象により、生徒数の減少傾向が現実のものとなります。入学者数が減少すれば、確実に卒業生の数も減ってきます。そのことは、終身会費を納める会員が減少し、山桜会の財政基盤そのものが危うくなって同窓会活動自体が困難になる、ということです。

2つ目には、山桜会の活動が、ホームページの運営、学院の教育改革への参画など、以前にもまして飛躍的に活動が活発化しており、資金的にみても、将来的には経費の増加傾向が十分に予測される、ということです。

3つ目は、山桜会の活動が、より母校の教育改革に向けられていることです。教育改革支援の一環として、山桜会賞の創設など現役生徒に対する支援活動も含まれており、私たちの年会費を、母校に還元していこうという発想があります。

卒業生にとって母校が発展してくれることは、好ましいことであり、私たちは今後この路線を進めていくつもりです。

この意味で、私たちの今後の年会費は、財政基盤を確立した上で、主に母校の教育支援に向けられる、という趣旨でご理解いただければ幸いです。

追手門学院120周年記念事業と山桜会の役割

卒業生集団である山桜会としては、母校の発展に寄与すべきは当然のことです。そこで、卒業生の立場から見て、母校の120周年記念事業に対する基本的構想

として意見を述べさせていただくならば、従来のような単なるお祭りだけの記念事業に終わるべきではありません。むしろ、教育改革の観点を前面に打ち出した周年事業であるべきだと思います。

一言でいえば、追手門学院の「名門の復活」を目指せ、ということです。

このためには、追手門学院という伝統を誇る「古い革袋」に、従来の固定概念を越えた魅力ある学院の構築という「新しい酒」を注ぎ込む必要があります。

母校の教育改革の目標設定。それは、総合学園の機能を十二分に発揮させることでしょ。

幼・小・中高・大・大学院の慶応型一貫教育を目指せ!

これも、私学追手門学院のめざすべき道ではないでしょうか。

要は、「オール追手門」の実践あるのみです。追手門学院が目標とする教育改革は、追手門が本来掲げる、「社会有為の人材を育成する」という理念を実践することにあります。

もちろん教育水準の向上も、それ自体は大切なことですが、これからは、従来のように、単に偏差値を高くすればよいというものでなく、個性的な生徒の育成、国際人として通用する人材の輩出をすべきです。このためには、まずは生徒を指導する立場にある先生自体の質を高めていかなければなりません。

文武両道で大阪一の学園を目指せ。

個性派学生を育てよ。

国際的指導者となるべき人材を輩出せよ。というのが、学園内外のみんなの願いではないでしょうか。

教育内容の相互交流も大切なことです。教員の全学的人事交流が可能になれば、あらゆる分野での適材の確保が容易になるでしょう。生徒・学生たちも全学的交流を広げる、例えば、茨木中highと大手前中highの共同学習・共同企画の試みなど、夢だけに終わらせてはならないと思います。

また、全学的観点からすると、小中高のレベルアップには追手門学院大学のテコ入れが不可欠でしょう。そのためには、目玉学部・学科の新設、例えば法学部など最近の人気学部、人気学科の取り込みなども視野に入れる必要があると思います。

また、学内のIT化を進める観点からは、総合学園としてのホームページの充実も必要でしょう。今日のような情報社会では、日頃から、情報収集・情報発信体制を強化することが、生徒募集、学園紹介などの場面に大きく威力を発揮します。

そして何より「学校法人組織の機能的

再編」、「経営能力の強化」が先決でしょう。

従前、追手門学院に対する評価としては、「経営母体がはつきりしない。」「誰が経営しているのかわからない。」「追手門には顔がない。」との意見が出されていました。

むしろ今後は、法人理事会が追手門学院の経営主体であることを明確に打ち出す必要があります。同様に、学校法人理事会による人事権の掌握、指揮命令系統の一貫性、校長選挙の廃止など、運営体制にまますのメスを入れる必要があります。

学園の物理的な変貌の夢としては、発祥の地・大手前学舎を超近代的高層ビルへ変貌させることも一つの夢です。例えば、早稲田大学が、大隈会館をリーガロイヤル早稲田に変貌させ企業と提携して近代ビル化を図ったことのように、企業を巻き込んだ再編も大事なこともかもしれません。山桜会にとっては、同窓会館の建設も楽しみの一つであります。

さらに記念事業の開催をするとすれば、例えば、卒業生の一人である湯浅卓雄氏（元イギリスBBC管弦楽団常任指揮者）の指揮によるオーケストラ記念公演というの楽しい夢の一つではないでしょうか。

このように、追手門学院120周年事業に対する卒業生の役割、そして山桜会の役割は非常に大きいものがあります。

追手門学院と山桜会の未来像を求めて・・・

母校の教育改革・機構改革が進んでいく中で、卒業生集団である山桜会は、間違いなく重要な役割を果たしていきます。

学内からも、卒業生が法人経営のかじ取りにもっと多くの役割を果たすことが求められるでしょう。

これは、情報化社会のなかで、追手門学院卒業生の動向を把握できる唯一の中核機関がまさに山桜会だからです。

卒業生同士の双方向情報交換、異業種交流につながる仲間の情報提供、高齢化する社会の中での卒業生同士の心の交流など、山桜会は、情報の拠点であります。

後輩や、現役生徒への社会人としての関わりが期待されるインターンシップ制度、さらには母校を含めた社会への関わり集団として山桜会がもっと社会的役割・社会的貢献を期待されることになるでしょう。

私たち山桜会は、母校を中心にして、自らの生き甲斐の追求とともに、同世代・異世代の心の交流を求め、豊かな人生・豊かな社会のためにみんなで活動していきたいと願っています。